

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：33925

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520542

研究課題名（和文）日本語の good writing：第 2 言語と第 1 言語による比較

研究課題名（英文）Good writing in Japanese: Comparison between L2 Japanese and L1 Japanese

研究代表者

田中 真理 (TANAKA MARI)

名古屋外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：20217079

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、第 2 言語と第 1 言語としての日本語小論文を比較・検討することにより、より広い視野から日本語小論文の good writing の要素を追求し、ライティング教育に貢献することである。英語話者と中国語話者と日本語母語話者による 2 種類の小論文（「比較・対照」の説明・意見文、2 つの立場から 1 つを選ぶ論証文）を収集し、主に構成面と「読み手」意識について分析した。その結果、母語による傾向は多少あっても、全体的にマクロ構成が真に身に付いていない、メタ言語が効果的に使えていないことが示唆された。また、英語話者以外は、総じて「読み手意識」が低い傾向が見られた。本研究により第 2 言語、第 1 言語に共通した今後のライティング教育の課題が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to clarify elements of good writing in Japanese essays in broader perspective by examining both L1 and L2 Japanese essays in order to contribute to the Japanese writing education. The data collected consists of two kinds of essays (an expository essay and an argumentative essay) written by native speaker of Japanese as well as L2 learners of Japanese (native speakers of English and that of Chinese). These essays were analyzed focusing on “organization” and “reader awareness.” The results indicate that although small differences were observed among groups, overall, writers from all groups did not fully understand the macro organization of an essay, nor the effective use of meta linguistic discourse markers. Also, compared to writers in the English group, writers in both the Chinese group and the Japanese group seemed to show less awareness of their readers. It is clear from this study, L2 as well as L1 Japanese writing education needs to develop improved ways to teach organization of an essay and reader awareness.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育・ライティング・第2言語・第1言語・評価・読み手・構成・メタ言語

1. 研究開始当初の背景

日本語教育における good writing の研究は、いい作文の決定要素やアカデミック・ライティング評価について等、既に行われていた(田中・坪根・初鹿野, 1998; 村上, 2005, 2007; 田中・長阪・成田・菅井, 2009)。また、日本語教育の多様化に伴い、大学等の教育の場を離れた日本人との接触場面での good writing (例えば、メモや手紙等) の一般日本人による評価について(宇佐美・森・吉田, 2009) も検討され始めていた。

アカデミック・ライティング、特に小論文が日本語教育において注目されるようになったのは、2002年に日本留学試験に記述問題が採用されてからであろう。記述問題の採点基準を見ると、最高レベルである「レベルS」は「課題に沿って、書き手の主張が、説得力のある根拠とともに明確に述べられている。かつ、効果的な構成と洗練された表現が認められる」とあり、これらの要素を備えた小論文が good writing だとみなされると推察される。しかし、サンプルは示されておらず、「効果的な構成」「洗練された表現」が具体的にどのようなものであるのかは明示されていなかった。

日本留学試験(日本語科目)は2010年に改定されたが、改定前の記述問題の形式(<A>かかどちらかの立場に立って、その賛成理由を書く)への対策の結果、「まず立場を表明し、次に理由、反論等を書いて、結論にもう一度立場を述べる」(『日本留学試験 実践問題集』等)という、一種パターン化された小論文の「型」ができつつあるように思われた。しかしながら、大学で求められるアカデミック・ライティングは、その目的・意図に合った論理的展開パターンを使って、広い視点から書き手の考えを表せるようなものでなくてはならない。そして、それは

第2言語(L2)ライティングに特有のものではなく、第1言語(L1)ライティングにおいても求められるものである。そこで、L2ライティングとL1ライティングを比較することによって、相互に欠けている点を補完できると同時に、good writingの要素もより広い視野から検討できると考えた。

[引用文献]

宇佐美洋・森篤嗣・吉田さち(2009)「外国人が書いた日本語手紙文」に対する日本人の評価態度の多様性—質的手法によるケーススタディー—『社会言語科学』12(1), 122-134.

田中真理・初鹿野阿れ・坪根由香里(1998). 「第二言語としての日本語における作文評価—「いい」作文の決定要因—」『日本語教育』99, 60-71.

田中真理・長阪朱美・成田高宏・菅井英明(2009)「第二言語としての日本語ライティング評価ワークショップ—評価基準の検討—」『世界の日本語教育』19, 157-176.

村上京子(2005)「日本留学試験における記述問題の実施方法と分析観点に関する実証的研究—記述問題の問題形式・量及び評価基準の適正さについて—」平成15~16年度科学研究費補助金萌芽研究研究成果報告書

村上京子(2007)「記述問題の信頼性の検討—同じ日本語学習者の異なる種類の作文は同様に評価されるか—」平成17~18年度科学研究費補助金萌芽研究研究成果報告書

2. 研究の目的

本研究の目的は、L2及びL1としての日本語小論文を比較・検討することによって、より広い視野から日本語小論文の good writing の要素を追求し、ライティング教育に貢献す

ることである。

平成 19～21 年度科学研究費補助金で、評価者の評価の際のプロトコルや評価結果、アンケートを分析することにより、小論文の good writing の決定要因や問題点もある程度明らかになった(田中・坪根, 2011)。しかし、同時に、評価者の個人的要因の大きいことも明らかになったので(田中・長阪, 2009)、本科学研究費補助金の 2 年目からは、評価者の評定からは切り離して、小論文自体の質的分析を行うことにした。具体的には、good writing の要素を (a) reader awareness と (b) 小論文の「マクロ構成」と「パラグラフ内の構成」に絞って分析することにした。

[引用文献]

田中真理・長阪朱美 (2009) 「ライティング評価の一致はなぜ難しいか—人間の介在するアセスメント—」『社会言語科学』12 (1), 108-119.

3. 研究の方法

2 の研究の目的において述べたように、good writing の要素を (a) reader awareness と (b) 小論文の「マクロ構成」と「パラグラフ内の構成」の観点から分析することにした。

(a) Reader awareness とは、読み手を意識して書かれているかということで、Hinds (1987) によると、読み手の推測を期待する reader responsibility の言語(例: 日本語や中国語)と、書き手が責任を持って書く writer responsibility の言語(例: 英語)がある。

(b) 小論文のマクロ構成(序論・本論・結論)、パラグラフ内の構成(英語の topic sentence, supporting sentences に相当するもの)や「メタ言語」(「まず、次に、最後に」や「次に～について説明する」等の、内容そのものではなく文章の構成を示し、内容を理解しやすくするための表現や説明)について分析することにした。メタ言語は、形からは語句レベルのものと文レベルのものがあり、機能の面からは「予告のメタ言語」と「まとめのメタ言語」がある。

(1) 小論文とその書き手

①小論文(プロンプト)

- ・プロンプト A: 「ファーストフードとスローフード」(「比較・対照」の説明・意見文)
- ・プロンプト B: 「通学授業と遠隔授業」(2 つの立場から 1 つの立場を選ぶ論証文)

②小論文の書き手

(E) アメリカの大学で日本語学習をしてい

る英語話者(上級レベル)

(writer responsibility の言語)

(C) 日本国内の大学に在学している中国語話者(上級レベル)(reader responsibility の言語)

(J) 日本国内の大学に在学している日本語母語話者(reader responsibility の言語)

* (E) の英語話者のデータは日本国内では収集できなかったため、海外共同研究者がアメリカの上級コースのある大学(Princeton University 他 23 大学)に依頼し、研究協力者を募集した。(C) と (J) は代表者が日本国内の大学で収集した。

(2) 調査方法

(E) と (C) は、図 1 の (#1) ~ (#5) を順に Dropbox (オンラインストレージサービス) を使って行った。

(#1) アンケート 1: 日本語学習(背景)について

(#2) J-CAT (オンラインで受けられる日本語能力試験)

(#3) Essay 1: 説明・意見文(比較・対照)

(#4) Essay 2: 投稿文(論証)

(#5) アンケート 2: L1 におけるライティング教育, Essay 執筆中の L1 ライティングの影響の認知等について

日本語母語話者には、上記の(#3)と(#4)及び「読み手」に関するアンケートを実施した。

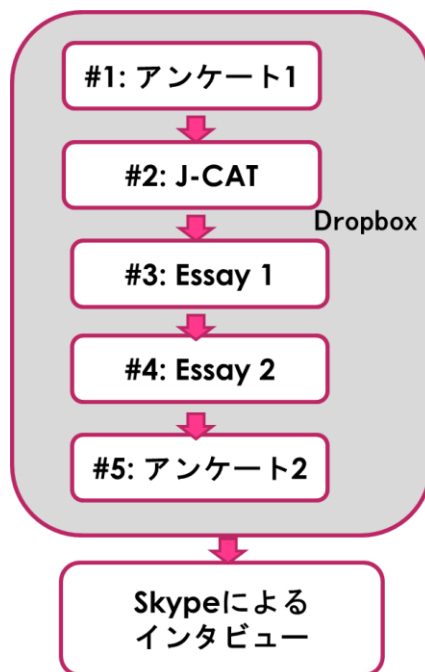


図1 調査の流れ

(3) 分析方法

以下の①～④について分析した（一部は分析中）。

- ①マクロ構成：序論，本論，結論があるか，そのバランス，主張の位置，ライティング全体の首尾一貫性（特に序論と結論の一貫性）
- ②ミクロ構成：各パラグラフのトピックセンテンス，サポーティングセンテンス等に該当するものとその位置，英語のパラグラフ・ライティングとの関係
- ③「メタ言語」：種類とその効果
- ④英語話者と中国語話者の L1 ライティングと L2（日本語）ライティングでの書き方の違い，L2 ライティングにのみ認められる特徴等

[引用文献]

Hinds, J. (1987). Reader versus writer responsibility: A new typology, In U. Connor, & R. B. Kaplan (Eds.), *Writing across languages: Analysis of L2 text* (pp. 141-152). Reading, MA: Addison-Wesley Publishing Company.

4. 研究成果

英語話者 (E) と中国語話者 (C) と日本語母語話者 (J) による 2 種類の小論文（プロンプト A: 「比較・対照」の説明・意見文）と（プロンプト B: 2つの立場から1つの立場を選ぶ論証文）を，主に構成面と「読み手」意識の点から分析した結果，以下の傾向が認められた。

- (1) マクロ構成（序論・本論・結論）に関して，「結論」意識は (E) (C) (J) 全てにある。
- (2) 「序論」は，プロンプト B の場合には立場を明らかにするために作られるが，プロンプト A の場合にはいきなり本論に入る例もある。この傾向は母語に関わらず認められる。
- (3) マクロ構成の意識はあっても，「序論」や「結論」が 1 文で終わっている例がかなりある。全体的に認められるが，(J) や (C) に顕著である。
- (4) 「序論」に，本来「本論」に書くべきことが書いてある場合がある。これは (C) に顕著に見られ，背景説明が長く，序論が半分以上を占める重い構成となる。
- (5) 「メタ言語」は，効果的に使われている例もあるが，多用され，形式的で稀薄な印象を与えてしまっている例もある。
- (6) 「読み手」意識は (E) に強く，例を挙げて，読み手に呼びかけるように書かれているが，その結果，インフォーマルな印象も与える。(J) や (C) の「読み手」意識は総じて低い。

以上より，母語による傾向は多少あっても，全体的に，マクロ構成が真に身に付いていない（プロンプトで指示されないと序論が書けない，また序論や結論に書くべきことが分かっていない等）ことが示唆された。メタ言語の効果的な使用法，読み手意識の改善を含め，L2, L1 に共通したライティング教育の今後の課題が明らかになったと言える。

今後の予定として，L2 話者に関しては，日本語能力 (L2 proficiency) との関係調べるために，日本語能力テスト (J-CAT) の総得点が 200 点以上の場合と 200 点未満の場合に分けて，上記 (1) ～ (6) の観点から分析する。そのためにも，今後データ数を増やす必要がある。

今回のプロンプトでは 600 字程度の小論文と指定したが，パラグラフが全くないものもあった。また，あっても 1 つのパラグラフが短かったため，今後は字数を 600 字～800 字にすることを検討している。また，序論が長く，本論や結論が量的にも質的にも十分でないデータもあったため（時間制約のためとは限らないが），時間を気にせず書けるようにする。さらに，アンケート終了後に，スカイプでフォローアップ・インタビューを行い，認知的な面からも L2 ライティングを分析する（図 1 を参照）。

研究成果の第 2 点目としては，『Good writing へのパスポート（仮称）』という，主に L1 話者（日本人大学生）を対象としたライティング・テキストの作成が挙げられる。これは，本科学研究を含めた一連の good writing 研究（平成 16-18 年度科学研究費補助金研究「第二言語によるライティングについての基礎研究：Good writing とは何か」，同平成 19-21 年度科学研究費補助金研究「第二言語としての日本語ライティング評価：Good writing のさらなる追求」）の成果である。このテキストの作成経緯及び L1 ライティング評価基準と L2 ライティング評価基準については，本報告の 5 の①に記した。

また，今年 3 月，スペインにおいて「Good writing について考える：プロンプトと評価」というライティング評価のワークショップを行った。初めてライティング評価のワークショップを行ったのは，最初の科学研究（2006 年）においてであったが（前出の田中・長阪・成田・菅井，2009），今回は L1 ライティングとの共通点も視野に入れて行った。今後は，L1 ライティングと L2 ライティングの双方を視野に入れたライティング研究を行いつつ，その成果をライティング・ワークショップに還元していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計5件)

- ① 田中真理 (2013)「第2言語としての日本語のアカデミック・ライティング評価基準から第1言語としての日本語の Good Writing 評価基準作成へ」(大井恭子代表)『平成24年度～平成27年度 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)第二言語ライティング研究の現代的課題と解決のための将来構想—東アジアからの発信—研究成果報告書』No.1, 130-142. (査読無)
- ② 田中真理 (2012)「L2 ライティング・フィードバック—2つのアプローチ: L2 ライティング研究と SLA 研究—」(大関浩美・名部井敏代・森博英・田中真理・原田三千代 第22回第二言語習得研究会全国大会 パネルディスカッション報告「フィードバックの効果を考える」), 『第二言語としての日本語の習得研究』15号, 100-102 (報告全体:92-105). 第二言語習得研究会. (依頼)
- ③ 田中真理 (2012)「アカデミック・ライティング評価における個人的要因」(宇佐美洋・田中真理・徳井厚子「評価の「個人差」に着目することの意味—より深い自己認識につなげるための評価論—」), 『ヨーロッパ日本語教育 (*Japanese Language Education in Europe*)』16, 41-46 (論文全体: 36-50). ヨーロッパ日本語教師会 (AJE). (発表時に査読有)
- ④ 田中真理 (2011)「L2 ライティング・フィードバック—2つのアプローチ: L2 ライティング研究と SLA 研究—」パネルディスカッション「フィードバックの効果を考える」『第22回第二言語習得研究会 (JASLA) 全国大会予稿集』20-25. (依頼)
- ⑤ 田中真理・坪根由香里 (2011)「第二言語としての日本語小論文における good writing 評価—そのプロセスと決定要因—」『社会言語科学』14 (1), 210-222. (査読有)

[学会発表] (計5件)

- ① 田中真理 (2013年3月15日)「Good writing について考える: プロンプトと評価」スペイン日本語教師会 (招待研修会) 国際交流基金マドリッド日本文化センター, Madrid, Spain. (依頼)
- ② 田中真理 (2011年12月10日)「L2 ライティング・フィードバック—2つのアプローチ: L2 ライティング研究と SLA 研究—」大関浩美・名部井敏代・森博英・原田三千代によるパネルディスカッション「フィードバックの効果を考える」第22

回第二言語習得研究会 (全国大会), 国際交流基金日本語国際センター, 埼玉. (依頼)

- ③ 田中真理 (2011年8月25日)「アカデミック・ライティング評価における個人的要因」宇佐美洋・田中真理・徳井厚子によるパネル「評価の「個人差」に着目することの意味—より深い自己認識につなげるための評価論—」13th EAJIS International Conference in Tallinn, Tallinn University, Estonia. (査読有)
- ④ 田中真理 (2011年3月6日)「第二言語としての日本語小論文評価: 現状と今後の課題」, 7th International Conference on Practical Linguistics of Japanese, San Francisco State University, CA, USA. (査読有)
- ⑤ Mari Tanaka (Sep. 3, 2010). *Good essays in Japanese as a second language: Assessment by Japanese raters in Japan*. Presented at the Eurosla 20. (20th Annual Conference of the European Second Language Association), Univ. of Modena and Reggio Emilia, Italy. (査読有)

[図書] (計1件)

- ① 田中真理・阿部新 (2013年12月出版確定)『Good writing へのパスポート』くろしお出版

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 真理 (TANAKA MARI)
名古屋外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号: 20217079

(2) 海外研究協力者

2011年度～2012年度
久保田 佐由利 (KUBOTA SAYURI)
Eastern Michigan University・准教授